ピア・サポーター自身の教育的効果についての検討
～ノートテイカーからの意識調査に基づいて～

溝渕　葉月*・相澤　雅文**
（＊京都教育大学附属京都小中学校・＊＊京都教育大学）

Examination about the educational effect of peer supporter oneself
Based on an attitude survey from Note Taker

Hazuki MIZOBUTI, Masafumi AIZAWA

抄録：本研究では、ピア・サポートの活動や意義をどのように認識しているか等について調査することで，ノートテイクを行ったピア・サポーター自身が受ける教育的効果について検討することを目的とした。その結果，ノートテイクを行ったピア・サポーターは，「情報保証を行うことは大切である」ことに気づいた学生が多いことが示された。ノートテイクの際には，話すスピードが早すぎるとテイクが追い付かないことや，効果音などはテイクしにくいことなどから，ノートテイカー自身の努力だけでは解決できないことも多くあり，分かりやすい授業構成や補助教材の提供，話す早さの配慮などの必要性についても気がついた。こうしたことから，教員養成に関連してピア・サポートの経験は有効と考えられた。

キーワード：ピア・サポート，大学，ノートテイカー，アンケート
Key Word: peer support, College, Note Taker , child with chronic disease

Ⅰ．問題と目的

「大学における学生生活の充実方策について－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」（文部科学省高等教育局，2000）では，今後の大学のあり方として「『教員』中心の大学から『学生』中心の大学への視点の転換」という提言がなされた。

2017 年度の「文部科学省学校基本調査」では，大学・短大進学率（過年度卒含む）は 57.3％となっており，2011 年度の 53.9％と比べると 3.4％上昇していた。そうした中で「授業や学習，大学生活に不適応を起こす学生も多くいる」（溝上，2012）ことや「入学目的が曖昧で友人関係に満足していないほど，大学不適応傾向が高い」（中村・松田，2013）といったように大学生に対する様々な支援が求められるようになってきた。

「大学，短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査（日本学生支援機構，2017）によると，障害学生数も年々増加しており，今後も増加傾向は続くこととされていた。同じく，実態調査によれば，高等教育機関における障害のある学生は，27,257 人であり，全学生に占める割合は 0.86％を占めていた。障害種別に見ると，虚弱・病弱が最も多く 9,387 人，次いで発達障害が 4,150 人，その他に，精神障害，肢体不自由，聴覚・言語障害などであった。大学に支援の申し出があり，それに対して大学が何らかの支援を実施した大学生は 13.848 人とされていた。これは全障害学生 27,257 人の 50.8％しか占めていない。今後，合理的配慮等の支援を必要とする障害学生への対応が大学の喫緊の課題となっていくであろう。

現在においても，障害学生支援室など専任の教職員が常駐する大学が増加している。しかし，学生への必要な支援に対する大学等の取り組み追い付いていないことは否めない。大学の教職員だけで学生の支援を実施することには限界がある。そのような状況の下，注目すべき取り組みとしてピア・サポートがある。Cowie.Helen＆Shape.Sonie(1999)によるとピア・サポートとは，若者がすでに持っている援助的性向を活かして適切な訓練と支援を与えることによって，自然な支援プロセスを促進するシステムとされている。すなわち，助けが必要な時

に身近にいる友人や同輩などの仲間による支援を意味するのである。ピア・サポートは学生による学生のための支援の取り組みである。日本学生支援機構によれば「大学等における学生支援の取組状況に関する調査」の全国の大学における実施率は 2015 年度で 42.2%であり，2013 年度の 36.4%と比べても分かるように実施率は徐々に高くなってきた。さらに，ピア・サポートの未実施校の 40.6%が実施を検討した。このように，ピア・サポートは発展を続けている取り組みといえる。

ピア・サポートの意義は，教員には話しにくいことも同じ学生同士なら話しやすく，同じ視点から援助が得られることである。また，木場（2004）は「コミュニケーションスキルを向上させ，自尊心や自己認識を高めることが出来る」と述べている。このように，学生自身への教育効果が得られることもピア・サポートの大きな特徴である。

本研究では，聴覚障害のある学生にノートテイクで情報保証を行っているノートテイカーが，ピア・サポートの活動や意義をどのように認識しているか等について調査することで，ピア・サポーター自身が受ける教育的効果について検討することを目的とした。

Ⅱ．方法

１　対象

聴覚障がい学生へのノートテイクを実施しいている学生 28 名を対象とした。28 名の内訳は男子５名，女子 23 名。

２　調査手続き

本研究の期間は 2017 年 11 月～12 月であった。回答は無記名で行った。

3　質問紙

フェイスシートは性別・学年・所属を尋ねた。まず，質問内容はピア・サポートに対する知識の有無，特別支援教育に関する事項，ノートテイクに関する事項，ピア・サポート活動に関する事項，ピア・サポートを通しての自己の変化，最後にピア・サポートを通して感じたことなど自由記述で全 11 問を尋ねた。質問内容は主に「はい」か「いいえ」のどちらか２択で答え，「はい」と答えた時のみ具体的な内容などを記述式で書くよう求めた。

Ⅲ．結果

１．ノートテイカーの属性

①ノートテイカーの性別

ノートテイカーは女性が 23 名（82%），男性が 5 名（18%），計 28 名であった。

②ノートテイカーの学年

表１　ノートテイカーの学年

学年	人数
学部１年生	５（18%）
学部２年生	６（21%）
学部３年生	８（29%）
学部４年生	４（14%）
学部（学年不明）	１（4%）
院１年生	３（11%）
その他	１（４%）
計	28

２．ピア・サポートの知識に関して

回答者のピア・サポートの知識の有無を表 2 に示した。

質問ではノートテイクを始める前にピア・サポートという言葉を知っているか尋ねた。「ピア・サポートを知っていた」と答えた人は 10 名で，「ピア・サポートを知らなかった」と答えた人は 18 名だった。

「ピア・サポートを知っていた」と答えた人には，何で情報を得たのかについて記述で尋ねた。ピア・サポートという言葉を知っていると答えた回答者の半数が大学で知識を得ていた。

表２　ピア・サポートの知識の有無

ピア・サポートの知識	人
ピア・サポートを知っていた	10（36%）
ピア・サポートを知らなかった	18（64%）
計	28

（ピア・サポートを何で知ったか）

・大学の授業（4 名）
・大学の授業制度案内（１名）
・テレビ（１名）
・インターネット（１名）
・教採の勉強（１名）
・友人から（１名）
・カウンセリング講座　（1 名）

３．『障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律』に関して

「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（以下「障害者差別解消法」とする）に関する知識の有無を表 3 に示した。

表３　「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」に関する知識

障害者差別解消法等の知識	人
障害者差別解消法と合理的配慮のどちらも知っている	15（54%）
障害者差別解消法のみ知っている	2（7%）
合理的配慮のみ知っている	6（21%）
どちらも知らなかった	5（18%）
計	28

『障害者差別解消法』を知っていると答えた回答者は 17 名で，「合理的配慮」という言葉を知っていた人は 21 名であった。どちらも知っていると答えた人は 15 名であった。

（障害者差別解消法を何で知ったか）

・大学の授業・セミナー（６名）
・ニュース・テレビ（６名）
・新聞記事　（３名）
・インターネット・SNS（2 名）

・教採の勉強（2 名）
・人から聞いて（1 名）
（合理的配慮を何で知ったか）
・大学の授業（9 名）
・教採の勉強（3 名）
・テレビ（2 名）
・本（2 名）
・講習会（１名）

４．ノートテイクの経験年数について

ノートテイクの経験年数を図８に示した。

表３　ノートテイクの経験の長さ

ノートテイクの経験	人
6 ヶ月未満	11（39%）
6 ヶ月以上～1 年未満	6（21%）
１年以上～1 年 6 ヶ月未満	3（11%）
1 年 6 ヶ月以上	8（29%）
計	28

全体の 39%である 11 名が「6 か月未満」で学部 1 回生がうち 5 名，大学院 1 回生が 2 名，特別専攻科が 1 名，無記名 1 名という結果であった。「1 年 6 か月以上」と答えた人で学部 3 回生が 4 名，学部 4 回生が 3 名，大学院 1 回生が 1 名であった。

５．　ノートテイクを通した障害理解について

ノートテイクを通して障害について理解したことはあったかどうかを問うた。「はい」と答えた方は 21 名で「いいえ」と答えた方は 7 名であった。

表４　ノートテイクを通した障害理解

障害について理解したこと	人
ある	21（75%）
ない	7（25%）
計	28

「はい」と答えた人には具体的にどのような内容を知ったかについて記述してもらった。

・　聴覚障害の程度が個人によって様々であること（8 名）
・　顔を見て口を大きく開けてゆっくり話すなど，自分が気を付けること（3 名）
・　聴覚障害者の特性の理解（3 名）

などであった。

6　ピア・サポートによる自分自身の変化

ピア・サポートを通してノートテイカー自身の変化の有無を表 5 に示した。変化があったと答えた人は 28 名中 20 名で，全体の 71%であった。

表 5　ピア・サポートによる自分自身の変化

自分自身の変化	人
ある	20（71%）
ない	8（29%）
計	28

具体的な変化の内容としては

・「ゆっくり話す」や「口の動きが見えるように話す」など話し方の変化（6 名）

・障害のある人と自然に関われるようになった（5 名）

・タイピング能力の向上があった（3 名）

などであった。

Ⅳ．考察

ピア・サポートを通してどのように障害理解が進んだかについて考察する。

ピア・サポートについての知識がある人の 10 名中 8 名は「合理的配慮」及び「障害者差別解消法」の特別支援についての知識もあった。特別支援の分野に関心のある学生は，知識を得る機会が多いと考えられた。2019（平成 31）年度からは「特別支援教育」が教職課程で必修となる。教員をめざす学生の，特別支援教育に関する理解・啓発や知識が拡充されるようになると考えられた。

ピア・サポートを通して，障害について知識が増えたと答えた回答者 21 名中 16 名は，特に聴覚障害についての内容を挙げていた。障害の程度の違いや，手話と口語を併用しているなどの障害そのものへの気づきだけでなく，ゆっくり話したり，口の動きが分かるように顔を見て話したりするなど，聴覚障害者と話すときに気をつけることにも気づいた。これは，休憩時間などに利用学生とのコミュニケーションを取ることでどのような困難があるか知ることができたことや，どのようにすると伝わるか経験したことで気づいたと考えられた。

また，「情報保証を行うことは大切である」ことに気づいた学生も多かった。ノートテイクの際には，話すスピードが早すぎるとテイクが追い付かないことや，効果音などはテイクしにくいことなどから，テイクできる内容に限界があることに気づいた。また，専門的な内容はその語彙の漢字や意味が分からない時もあった。ノートテイカー自身の努力だけでは解決できないことも多くあり，教授する側の障害理解をすすめ，分かりやすい授業構成や補助教材の提供，話す早さの配慮などの必要性についても気がついた。

参考文献

Cowie.Helen＆Shape.Sonie（1996）Peer counselling in schools：a time to listen．高橋通子（1997）学校でのピア・カウンセリング.川島書店

河田史宝（1999）ピア・カウンセリングの実際―生徒保健委員会の一環として―.日本教育大学協会　養護教諭部門全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会研究集録

関西大学，ピアサポート活動，関西大学 https://www.kansai-u.ac.jp/global/support/pier.html
春日井 敏之（2009.5）集団活動とピア・サポート活動--学校教育における可能性（ピア・サポート--子どもとつくる活力ある学校）-- (ピア・サポートの歴史と理論) .現代のエスプリ,502, 73-82
木場安紀（2004）学校教育におけるピア・サポート，http://www.u-gakugei.ac.jp/~nmatsuo/koba-kadai.htm
後藤 綾文・菊池 紀彦（2016.3）障がい学生支援推進に向けての取組 ： 三重大学における現状と課題.三重大学教育学部研究紀要 67 293-299
高等教育局医学教育課（2000）大学における学生生活の充実方策について （報告） －学生の立場に立った大学づくりを目指してー.文部科学省,2000 年 6 月 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm
中野 武房 , 森川 澄男（2009.5）日本の学校におけるピア・サポート活動--この十年の歩みと課題（ピア・サポート--子どもとつくる活力ある学校）.現代のエスプリ,502, 5-29,
中村真・松田英子（2014）大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響―帰属意識が媒介効果における性差及び適応感を高める友人関係機能―.江戸川大学紀要，24：13-19
日本学生支援機構（2017）大学等における学生支援の取組状況に関する調査(平成 27 年度).日本学生支援機構,2017 年 2 月 9 日 http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/__icsFiles/afieldfile/2017/02/14/h27torikumi_chosa.pdf
日本学生支援機構（2019）障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書.日本学生支援機構,2017 年 4 月 19 日 http://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/__icsFiles/afieldfile/2017/11/09/2016report3.pdf
西山久子(2001)ピアサポートプログラム導入による不登校回避の支援-スクールカウンセラー常駐高等学校における臨床的・実戦的研究-.
西山 久子（2009.5）ピア・サポートの歴史--仲間支援運動の広がり（ピア・サポート--子どもとつくる活力ある学校）-- (ピア・サポートの歴史と理論). 現代のエスプリ,502, 30-39
溝上慎一（2010）学生の学びと成長支援。京都大学高等教育研究開発推進センター編，生成する大学教育，4：119-145，ナカニシヤ出版
大石由起子・林典子・稲永努（2010.3）大学における新入生支援としてのピアサポート活動 ： 立ち上げの 2 年間をめぐる考察．山口県立大学学術情報 3, 29-44,
生涯学習政策局政策課（2016）平成 28 年度学校基本調査について（報道発表資料）.文部科学省，2016 年 12 月 22 日 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2016/12/22/1375035_1.pdf
玉水克明・浦　光博（2016）．追手門学院大学のピア・サポーターが提供するサポートの分析．アサーティブ学習高大接続研究（追手門学院大学アサーティブ研究センター紀要）, 1, 39-49.
Trevor Cole,Ph,D（1999）kids helping kids.Canada.バーンズ亀山静子・矢部文(2002)ピア・サポート実践マニュアル.川島書店
内野悌司・石田貴洋・三浦寿秀・栗田智未・兒玉憲一（2013）広島大学ピア・サポート・ルームの活動評価についての考察．広島大学保健管理センター研究，13-23
山田 剛史（2010.11）ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性（特集 ピア・サポート）．大学と学生,87, 6-15